

教え子から学ぶその2

2020.9.30

H中学校時代の教え子たちが20代半ばの頃にクラス会を催し、私を呼んでくれたことがあった。勉強が苦手だった生徒は、高校を卒業し、知り合いの大工さんに弟子入りし、りっぱな大工さんになっていた。クラス会では、私のことを「先生、先生」と何度も呼び、とにかく私にずっとお礼を言っていた。「先生が家を建てるときには、俺に言ってください」私は、彼を高校に入れることができ、心底よかったと思った。

福島高校に進んだ彼は、大学には進まず、自分で店を構え商売をしていた。野球を断念した後の彼の人生は、どのようなものだったのであろうか。果たして、血のにじむような努力をして福島高校に入ったことが、本当によかったのか。私は彼に「福高に入ってよかったか」とは聞けなかった。クラス会の後、彼からは連絡がくるようになり、近況報告があったり、「先生、一緒に飲みましょう」という誘いがあったりするようになった。最近では、中学生となった娘さんのことで相談されることもある。

同じH中学校時代の生徒には、高校入試で私立高校入試に失敗し、後がなくなった状態で県立高校受験を迎えることになった生徒がいた。私は、その生徒を面談の場で励ました。その生徒は、そのことをずっと覚えており、クラス会のときに「あのとき、先生に励ましてもらって最後までがんばることができました」と感謝の気持ちを伝えていただいた。この生徒は、県立高校に合格し、大学に進み、りっぱに社会人として活躍していた。

また、中学3年生のときに、お父さんが亡くなってしまった生徒もいた。お葬式が終わり、その生徒が登校してきたが、私は普段通りに接していた。受験前の三者面談も普通に行った。その後も、彼とお父さんのことを話したことはない。彼は、受験勉強をきちんとやり、第一志望の県立高校に合格した。合格発表の日に、彼と「おめでとう」と握手をし、私のほうが泣いてしまったことがあった。彼は口には出さなかったが、心に期するものがあったはずである。

我々は何年も教員として教壇に立つことができるが、子どもたちにとっては、その学年、そのときが、すべて二度と来ない大切な一瞬のはずである。子どもたちの人生の節目節目に立ち会うことができる我々は、どんな言葉かけをするのがいいのか、どのように接するのがいいのか、その度にベストの答えが見つかるわけではない。

そして、我々がしたことへの評価は、何年後かに教え子たちがクラス会などで教えてくれるのである。「先生は、あの時、ああ言ったけど～」などと、私のほうが教え諭される始末である。手厳しい教え子たちではあるが、私にとっては最大のアドバイザーなのである。

クラス会に呼ばれるということは、懐かしく楽しいのではあるが、自分の教育に対する評価結果が下される場でもあるわけである。また、手紙をいただくこともある。手紙の場合は、評価結果がずっと残ることになる。今回、「教え子から学ぶ」というタイトルにしたのだが、次から次へと頭に浮かんでくる教え子たちが出てきてしまった。

(次号に続く)